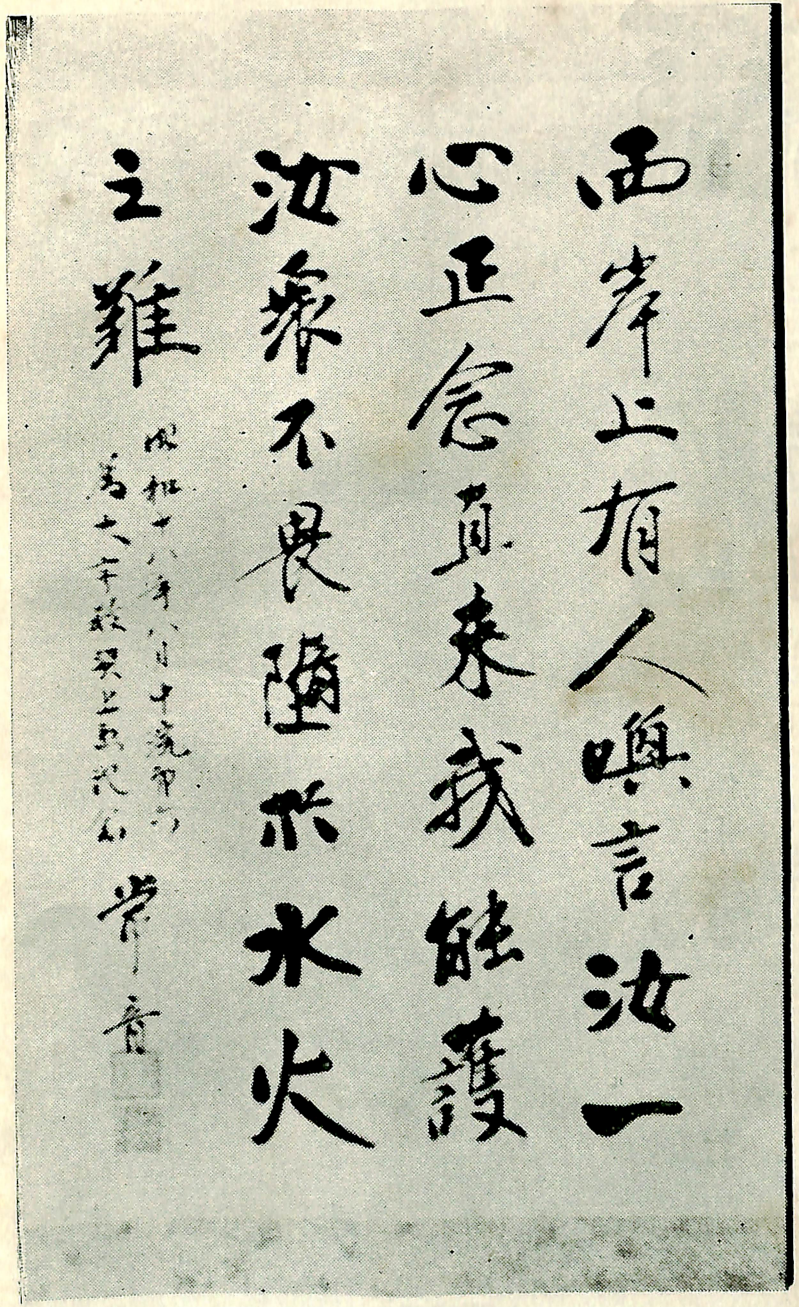
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十四年七月十五日発行（毎月一回、十五日発行）
（通第一二四号）

慈光

第十一巻　第七號

目次

矜哀善巧録（一）……近角常観…（3）
常音先生の身を以て示されたもの……柳瀬留治…（8）
常音先生御法話聞書……花田正夫…（12）
追慕の情念……三瓶徳英…（15）
正信偈私解（十一）……白井成允…（19）



近角常音先生御遺墨

高槻市大字佐平治氏蔵

この短冊は、左記のいわれで頂きました。

『自分は信仰の上で気附かして貰つたことで、二つの大きなことがある。

その一つは、長年会館で兄の話を聞いたけれど、サツパリ分らず、もう自分のような奴はいくら聞いても駄目と、捨て鉢な心になつて居た時、

「弟を子供の時から育てたけれども、それに別段不足はなけれども、彼奴がいつまでも〳〵我慢のやまぬのには、あれはこまつたものだ、可愛相なものだと兄さんが愚痴をこぼして居りましたよ」

との、この姉の一言に、初めてお慈悲の片鱗を知らせて貰いました。

その次には、その爾後三年後にまた行き詰つて、とうどう兄の前に持ち出した時、信心を失つて了うていかぬ、とは申しませず

「そう云う風に分つたと思うてもまたやりそこない〳〵それだからお呆れ下さらぬお慈悲でないか」

と言つてくれました。

この一言のおかげで百万力を頂いて今日まで通らせて頂いて来ました。』

と語られ乍ら、一道庵にお見舞下さいました昭和廿五年に、かねて用意申して居りました短冊にスラ〳〵とお書き遺し下さいました。

常観言　　常音

またやりそこない〳〵

それだからお呆れないお慈悲でないか

これこそ先生が信仰上、全く懸引のない、ぎりぎりの処を知らせて下さつたもので、坐右に掲げて朝夕仰いでは念仏させて頂いて居ります。

聚墨生記

矜哀善巧録(一)

近角常觀

今年明治四十四年は年の始より頻々として火宅無常の警鐘が鳴り響きて、到る処に善巧摂化の御力があらわれて下さる。唯事ならず感ずる次第である。

一月二日、我が最も旧友にして最も親友なる秦敏之兄の次男次郎君が亡くなつた報知を得てかけつけた。兄及び夫人が棺前に侍して多くの人に擁せられながら淋しそうであつた。秦兄は沈黙して居られたが、夫人が口を切つて此度こそは我慢の角を折られましたと叫ばれた。

この真摯なる告白によりて動かされたる私は、直に戒められた。今後は法に心掛けねばならぬという様に考へらるるならば可かぬ。如何にも無常迅速を示されたるは確かに警告には違いなけれども、是から聞法に心がけるというような廻り遠きことではない。次郎さんの死其の物が人生の無常なることを警告するのみではない。直に大悲の親様が待ち兼ねて呼びかけたまう事実である。今後心がける位の事でない、今が今、即ち次郎さん自身が待ちかねたまえる親様の御心を示すべく善巧矜哀の御使であると御話した。

秦兄も、次郎の死は実に小さな事実である、されど人世無常といふ緒を示されたものであると申された。いかにも一言なれど無常を感ぜられた事は骨髄に徹してあつた。そこで私が申すには、その小さな緒なれど、其人生の缺陥を見て飽までも哀愍摂受したまうのが大悲の御恵である。他力の遺る瀬なき御心は、我等が煩悩具足、火宅無常の世界はそらごと、たわごと、まことあることなき有様を御覧あらせられて、そのそらごとを憐みたまいて、飽くまでも御見捨てなきまことが、仏の御慈悲にてまします。

小さなる針の孔ほどの隙よりも光線がさしこめば、やがて室全体が明るくなる如く、次郎さんの死一つによつて、人生の当てにならぬことが知れて見れば、仏かねてこれを知ろし召して、当てにならぬ人生を徹頭徹尾あわれみ給う御慈悲の光は我等の心の中に充ち満ちて下さる、小さな緒の様なれども次郎さんの死は、やがて人生のすべてが当てにならぬことを示されたもので、その当てにならぬところをかねて御覧なされて待ちかねたまいし御慈悲が、尽十方無碍の光明にてまします。

秦兄は、かく色々話しつゝある間に、今まで胸が張り裂ける思をなして、一そ従来経営されたる事業を擲ち去らんかとまで余地なかりし心が、忽にして軽々となりて、ふんわりと船に乗りた心地であると話された。実に和讃の

盡十方の無碍光は無明の闇をてらしつゝ
一念歓喜するひとを　かならず滅度に到らしむ

との有様をいただかれた。又行巻に

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破り、速かに無量光明土に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵う也

という御教化は事実となつて現われた。

かくならるる前には秦兄は、次郎の死は大海の一滴であるというて、なお何か大なるものでも知らなければならぬという心組であつたらしい。

夫人は、次郎君の死其のものに意味を見出すことに力を入れて、大に戒められたものと見て、今後益々努力実行によりて、新たなる人生を辿らんという心組であつたらしい。

そこで私は、大海の一滴はやがて大海全体を示すもので人生の一滴が大海に入りて潮に一味になる如く、人生全体皆如来の恵によりて救わるるのである。即ち「凡聖、逆謗、ひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるがごとし」なることを話した。且次郎君の死は戒めるためでなくして、この大なる御慈悲に導く矜哀の善巧である。努力実行によりて新たなる人生が来るに非ずして、如何なる努力実行も益なき人生を、飽まで矜哀し給ふ御慈悲の光によりて新たにせらるるのである。且次郎君の死そのものに意味つけるのでない、むしろこれによりて御慈悲そのものを頂かしむるためである。

夫人も色々と苦しんで居られたのが、忽にして心が開発されて大安慰を得られた。特に夫人の母堂は著しく法悦の涙せきあえず、昨年失われた末娘の事と共に、深く矜哀の善巧の御慈悲を感ぜられた。

葬式の当日、再び訪うたる時、霊前に奏兄の歌が捧げられてあつた。曰く、

今日よりはうらゝやからと諸共に
浄き光に照らさるるなり

と。法名は釈浄光というのであつた。九段の講話と差支えて葬場へよう参らなかつたが、仄かに聞けば、式場で、来会者に向つて君の胸中を告白されたということである。

信ぜられぬ時は、信ぜられぬと卒直に告白する同君は、一度ひかりに接するや、暫くも黙して居られぬのである

其後、兄が主宰するシンガーミシン会社の東京に於けるすべての社員を集めて講話を開かれた。その前に、兄が自ら経験せられたるところを述べられた。兄の述懐に曰く、

従来自分は、自ら欺かず、他人に厄介かけぬということに於いて、人後に落ちずと考え、今日の所謂坊主の如く、自ら信ぜられもせぬことを信じた様に吹聴して、衣食するということを潔とせず、金銭を欲するときは、表面堂々として標榜して商売して金を得る。すこしも疾しき所はない。この十数年は心苦しき宗教家生活を脱して、却て平安を得つゝあつた。而して是よりは益々身体を健康ならしめ、益々奪斗せんと思い、馬の稽古を初め、二日の朝も稽古から帰つて来たのであつた。

次郎が悪いというので三階の病室に上りて見れば、医者は人工呼吸を頻りに試みて、モウイカヌ／＼、と言うて居る。麻疹にて喘息を起し、痰がつまつたのであつた。遂に空しくなつたのである。アヽ人間の知識の及ばぬは是程であるが、実に此度こそは真の宗教の味が分かつた。

今より顧みれば、従来は宗教は実に文明的の装飾品として居つたに過ぎなかつた。この貴重な品を、僧侶や牧師が粗末にするから、その価値が分らないと結局批評的態度に過ぎなかつた。実に自分自身の為であることを味わうことが出来なかつた。今では実に人生缺くべからざる必要を知り得た、とて、社員に対して勧められた。

私もその席で御話をした。回顧せば明治卅年、本山改革の時、同君は当時宗教界の有様と、青年の消極的態度にあきたらずして方針を変ぜられた。私は同君の如く手を放つ事が出来ぬため、宗教界に止りて煩悶して信仰に入つた。当時まで共に駢び馳せて居た親友同志が方針を異にすることになつた。

而して十七年振で共に信仰を語るようになつた。古の所謂霊山会上の契を再び実現する様な心地である。これを縁として毎月一回講話をシンガー学校楼上に開くことになつた。実に可憐なる頴悟なる敏活なる次郎君、我等に与えてくれたる善巧摂化の力である。

かく他家事のように思うて居る間に、忽にして我が家の事になつて来た。弟常音の妻が十二日夜産気づいた。我が妻は終夜つききりで世話をしつゝあつたが、産婆が水の出たのを気にして居つたが、産科医が従来診察して異状なきのみならず、至極発達宜しきとの事ゆえ、まだ安心して居つた。十三日朝になつて初めて位置に異状あることが分つた、産科医が駆けつけて呉れた。非常に案じたが無事に男子が誕生した。容貌柔和で正直そうで、その輪廓が全く我等が亡父そのまゝである。無事に生れた喜びで、月足らずで生れた子の非常に弱かつたことへの思ひ遺りが割合に少なかつた。今から思えば我が長女光子と全く同じ経過をとつたのである。そこへ数年なき極寒で特に其頃は厳しかつた。

名を附けてくれとの事で、実は数日前、経文を読み、無上正真之道という文字を見て少からず感じ、正真という名は頗るよき名であると考えつゝあつた。そこで熟考の上、十五日の朝、之を奉書紙に認め、経文ならびに祖語の典拠まで書き列ねた。如何にも令名であると我乍ら不思議と思いつゝ、我子、文常、真観と共に、聖人の正意、真宗の真髄を伝えかしと念じつゝあつた。弟は名が善すぎはせぬかとの事であつて、私はよければます／＼よいではないかとます／＼之をすすめて居た。弟の心では恰も我が長女の光子という名をつけたとき、如何にも崇高に感じたと同様に、人間ならず感じたらしい。午後に至つて有田君宛の長々とした手紙を認めて居つた。これは十八日に同君の宅の報恩講に、九州の御同朋が会合する筈であるから、昨年末已来、我が家庭を初めとして、我が同朋の間に起りつゝある信仰上一段の自覚につきて書いて居つた。

そこへ産婆が洗いに来て頗る弱つて居る事を言うて来た。多少は心配して居たものゝ、前夜産科医も何事もないと言うもの故、その日の午前の加き三時間も産婦に抱かれていたのであるが、気が附かんのである。

忽にして医師を招き、其紹介によりて小児科の医者を招く。小児科専門の経験ある看護婦二人を雇う。親類の代診はつききり、俄に瓦斯煖炉を備える。障子の目張りをする、出来る限りの手段を尽した。されど甚だよくない。実に胸塞がり、喉つまる心地がする。弟は断腸やる瀬なく、産婦に知らさぬ様に外に出て男泣をして居る。万一の事ありて産婦に障る虞があるというて産婆は生児を我家に移さんと云う。いかにも尤もなれど此場合生児が可哀そうである、又母親も隣室で看護して居るのを見て居るのがむしろ安心であろうと察したから、そのまゝ移さずに介抱することに

した。

併し容態が段々険悪になつて来た。皆の人が必死になつて力を尽した、妻は自分の乳を搾りて飲ませる、私はまた小児科の医者に走る、看護婦は人工呼吸をする、妻の親は来りて注射した。弟は悄然として生児の顔を見守りて居る。小児科医が駈けつけたが。残念なことには遂に事絶えた。南無阿弥陀仏。嗚呼可憐の極である。僅かに三日の人生、亡父の面影、とても〳〵唯事とは思われぬ。全く大悲矜哀の善巧、実に厳しき御催促である。午前九時二十分であつた。此時産婦はまだ知らぬのである。さきに移転さすのを拒んだ私は、残念で御座ります、と挨拶する医師や、看護婦を制して、産婦に対しては大学病院に入院さすと言いふらした。産婦は不思議にも全くこれを信じて、弟に言うには、全く死ぬのであつたが入院してよかつたという、下女に対して、病院へ小供の着換を持つて行つて呉れと言うたとて、下女が泣き崩れる。

その夜は私かに我家にて通夜を為し、かつて我長女光子が生後五十日余を経て、死んで横たわりたる室に横たえて、その時誦したる和讃、

弥陀、観音、大勢至　大願の船に乗じてぞ
生死のうみにうかみつゝ　有情をよぼうて乗せ給う

を再び誦した。かくまで度々の御催促を蒙ることかと、ひたすら無上正真道を仰ぐばかりである。

弟は心の底に穴が明きたようである。掌中の珠を奪われたとは、如何にもよく形容したものであると、底なき寂しき間に、深き〳〵御慈悲の御恵みを仰ぎ奉りて居る。

翌日は親友、近隣、学舎諸君の深き同情を蒙りて、其夜学舎に於て通夜をして、無上正真道の境界より穢土の我等を待受け給うことを仰いだ。

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来世さとりのまえの縁を結ばんとなり。われおくれなば人に導かれわれさきだたば人を導かん。生々に善友となりて、互に仏道を修せしめ、世々に知識として、ともに迷執をただん」

実に、正真は我等がために善知識である。越えて十七日学舎に於いて葬式を行い、日暮里にて荼毘を行い、十九日拾骨し、中陰壇をかざりてあるのである。而して心ならずも産婦にはまだ知らさぬのである、如何にも罪深き所為である。然し産科医の厳禁する所である。如何とも致し方なき世の有様である。

それにつけても巣鴨監獄の教誨師、花木君につき同情する次第である。同君も此頃出産ありて、児も早世したのみならず、産後の為、夫人も逝去せられたのである。

来書に曰く。逝去の当日、夫人の父と君とが枕辺に坐して、左右より、生れて初めて真の説教を致し候。死の宣告をききて如何に悶えるかと、それのみ懸念致し居り候いしに、想像とは全く反し、殆ど驚きの相なく、両人の一言一句を深く味わひ、何等の疑念もなく、如何にも美わしく真信を獲得致し、それより苦しき中より称名の声絶ゆることなく、枕辺に坐せる両親、兄弟、及君、主治医等にまで厚く礼をのべ、念仏諸共、眠るが如く逝去されたとある。

同君、結婚後未だ一年も経過せざる今日、かゝる悲惨なる死別をなさねばならぬ事とて、彼を思い此を思い、万感胸に迫りて言う所を知らず。如何にしぶとき私も、この度こそは念仏のみぞまことにでおわします事を味ひ、広大なる御慈悲に醒め申候とある。

常音先生の身を以て示されたもの

柳瀬留治

常音先生がなくなられてもう七年忌ということですが、つい二三年前のような心持です。

先生の没後、先生がいられたらお目にかかつてお聞きしたいと思うこともあるのです。その時、きつとこう言われるだろうと思い、先生の仰言るお顔付が一緒に目に見えて来るのです。御在世の時以上、思うと直ちにおあい出来、親しくお話が出来るのです。そして私の業のすべて、悩みのすべてを知り抜いて下さるのです。

先生は全く生きた仏であつた。御在世中、何か問題を持ち悩みお尋ねしようと思い、伺うと、先生のお顔を見る途

端、にこ〳〵と笑つていられる。それ丈で思つていた凡てが消えて、何もこと更申し上げる必要がなくなり、世間話をして帰つたことが屢々でした。

先生のその笑まえの中に「またあと戻りをやつたかい」といつた笑まえなのです。「害せじと思うとも百人千人を殺すこともあるべし」のお心がお顔に見られるのです。恐らく親鸞聖人が唯円坊にこの言葉を仰言つた時のお顔はあはしたお顔であつたのであるまいかと思うんです。底の底まで知り尽くされて見ると言うことはなく、唯念仏が漏れ出るだけ、それで事は終りです、煩悩は無尽なんだ。言い並べても果しがない。「唯知つてるよ」と言われると、心の底抜けになり、詰つていた泥がぬけてずん抜けになるんです。

先生はいかなることでも「うんそうか」とお聞き入れになり、いかん、と言われたこともなく、意見されたことなど曽てなかつた。

まだ信仰に気付かして頂いて間のない頃、先生に甘えて何かぐさ〳〵したことを云つたのであろう。先生が真顔になり、端然と

「君は君の思う勝手だが、わしの思つていること、信じていることまで君の力で冒せないだろう」

と仰言り

「弥陀いかばかりの力ましますと知りてか、罪業の身なれば救われ難しと思うべきや」

のお言葉を仰言つた。ビックリして先生のお顔を見仰いだことであつた。

私の心の如何に関らず、巍然としてましまし、私のあらん限りの全部を引き受けて動じない仏、その仏の姿そのものであつたからです。

それからは如何に心が散乱しても、我に搔き乱され給うことなき高所に在して

「常に見守り、摂取して捨てないぞ」

との、この言葉が巍然としていて、自分の何を持ち出して手向いても、これを抜き去ることの出来ない大願業力でましますことに気付いたのです。

ぐさつくのはこちらの性分、散乱狂気するのがこちらの性分、

「だからこの大願業力の綱を我は放さず握つているのだ」

とのお言葉、それが何処までが仏で、どこまでが先生だか、先生も仏も親鸞聖人も一つものとなり、我が前に現にましますのです。

先生のそした態度に二度接したように覚えています。その一つは無二の親友である毛利君が中耳炎で危篤になり、先生が最後の手段をもつて、病院から運び出し、田所先生

に一命を助けて頂いた。その際同君の兄が、予め費用万端につき先生の指図に一任し乍ら、生命が助つた後に、田所先生への謝礼を渋つた。そこで先生が大層怒られ、お礼のお菓子箱を突き返そうとされたことがあつた。同君が其後、「兄が先生に対して不遜な感を抱いていて困る。何とか仲に入つて前通りにしてくれ」

と私に頼むのであつた。兄の言い分は「自分も今日まで社会的に尽している点、常音先生に席を譲るものでない」という風な高上りをしたことを言うのであつた。

様子を伝えると先生は

「己を知らぬにも甚だしい。もつと酷く、根こそぎに叩き落してやらねば、己の分際が判らぬのだ。」

と仰言つた。だが同君が可哀想なので、荒立てて言わぬことにされた。言つても信仰の判らぬ人間には無駄に終ると思われたのであろう。

先生は誠にやさしいお方で、心からの謝礼だと、些細なものをも、お喜びになる。だが誠の伴わぬもの、対価的な気持が見えたらさつぱり断つてお受けにならない。もともと先生の説かれる信仰は、法施によつて布施を受けるといつた職業意識の雑ること自体、他力信仰を蠹毒するとされ、頼まれもせぬ人のことであつても、それが憐れで捨てられぬ、どこまでも見て取つて救おうとの本願真実の不思議で、値のない、やり場のないものを買い取つてやろうとの不思議の本願、いわば一方的行為である。対価的な気持がまじると本願の不思議が不思議でなくなり、お慈悲が届かないという所に根本があつてのことです。

従来僧侶が生活的であつた。それを俳し、経済生活の上では、全く先きの当ても、見通しもつかぬ暗の中を、願力自然一つにお任せして生き貫いて来られたのです。

それは元々常観先生の歩み来られた道で、常音先生がそれに生死を托して来られた道なのです。常観先生は地方伝道に今発とうというのに、道を求めて来た人に熱を籠めて話していられる。見ると蕎口に汽車賃を持つていられず、大奥様が驚き、苦心されたことも屢々あつたことを漏れ承つたことです。

先生の信じていられる願力自然は、身の罪業も、宿業も一切合切見そなわして憐んで迎え取つて下さるお力で、御自らの経済生活も、妻子眷属の生活も健康も、一切を願力自然に任せ奉つた、全くの私なき絶対他力の御生涯であつた。それは両先生共、生涯同じ歩みであつたのです。

そして、唯々先きも分らぬ闇に生き悩んでいる我々に念仏一つであることをお説き下され、又身をもつて示して下されたのです。

我々御同様に、己にしがみついて、仏のお心を聞くとし

ない者に、本願の不思議に気付かせるいう事は、迚もただ口で説いて下さる丈では判るものではない。心をもつて示し、身をもつて示して下された、あの、どこ〳〵までもの強い力、迸しる熱にほだされ、しぶとい私も気付かせて頂けたのだと思うのです。

先生が親鸞聖人の「われはこれ賀古の教信沙弥の定なり」の御持言。それからまた「某閉眼せば加茂川にいれて魚に与うべし」の御言葉をよく仰言いました。

そして先生の信仰も、一切親父を出づる何ものもないことを仰言いました。そしてお骨は江州のお寺にある御父、常随法師の墓石のもとに帰えし親父と共に土と化することを本望として御一生を終えられ、そして御父、常随法師の御骨のかたわらにお入りになつた。

先生は殊更に麗々しくお名前を刻んだ碑を残さぬを本望とされた。聖人も先生もはかない人間としての真実な終焉を示されたことが尊く、はかない人間の真実なさまをお示し下されたと思うのです。

私はこの頃痛切に思うのです。人間がこの地上に現われて一万年と言われるが、何れも空しく土となつて消え失せたことは草木といささかも変る所がないど思うんです。朽ちて土になり、そこに芽が生え伸びる、哀れな一生です。お互に苦労辛酸の一生ですが、空しく土になつて跡方もなくなるんです。

せめてにも人間に生れた甲斐として、この涯しのないおのれの迷いを、この本願念仏によつて救われること、これ以外、何ら光とするもののない、我々の一生だと痛切に感じるのです。それにつけてもお導き頂いた先生の恩が忘れ難い、尊い光です。朽ちてゆくべき私の、闇にお ちてゆく私の、唯一つの光です。いよ〳〵暗くなればなるほど、たよりなく、はかなくなればなるだけ、いよ〳〵輝きを発してくるのを覚え、ただ念仏するばかりです。私も毎日一生懸命何かやつているんですが。子供達が泥団子をこねつているのとちつとも変りはありません。

常音先生御法話聞書

花田正夫

（前書）この聞き書は昭和十八年夏、名古屋で御聞き申したものの概要と、昭和十一年三月吉田延世様の求道会館での常音先生御法話聞き書とを綜合して誌しました。このことにつき文中の浅井鍵治郎様にも一覧を乞いました。皆様に御礼申上げます。

東京に野依源吾さんと云う実業家があつた。氏は大分県の人で、形式的仏教に飽き足らず、明治の文明開化の波と共に盛んに宣伝されて来たキリスト教を信じ、上京後は植村牧師に、師の没後は内村牧師に導かれて洗礼をうけ、信者として非常な真面目な人であつた。洗礼をうけられて後は毎月の収入の何割かを献金して六十歳まで続け、教会の建設、牧師の養成等々に大変尽力をして居られた。

話は前にかえるが、長男の誠君が、キリスト教を奉じながら煩悶におち、一日内村師を訪ねて、その苦しみを訴えた。すると、厳格な内村師は

「それは修養不足のためである。もつと聖書を学び給え」と。誠君これを聞いて大いに失望落胆して、悄然として帰宅した。

その頃米国帰りの渡辺という人、たま〳〵このことを聞いて、それを見かねて「近角先生に聞け」と紹介した。同君はそれから求道会館に通うて聴聞し、仏の慈悲に浴し、内村師に見離された淋しい心もここに大満足するようになつた。

丁度その頃幼年学校に学んでいた同君の弟が病気となり、その病が篤い時、また常観先生の教を聞いて、大満足して念仏往生を遂げて行つた。

こうしたことから野依氏の夫人も、子達も、皆仏教信者となり、氏の許しを得て、家の片隅に仏壇を祭り、朝夕礼拝を続けていた。

こうした状態のまゝで何十年か過ぎ去つた。然し真面目なキリスト信者として、氏が最も苦しみ悩んだ問題は、善悪のことであつた。

「絶対に善きことは為すべし。然るに……」

たま〳〵、氏の子女が、故あつて婚家から離別して帰るという事件がおきた。この時氏は、

「この不幸は何故か。神の恵みということよりすれば、このようなことは無い筈である。これというのは自分の信仰の不徹底のためである。又自分は仏教を聞くので神罰を蒙つたのであろう」

と思いつめられた。

更に思いは種々に乱れて「自分は今日まで収入の幾割かを献金し続けて来たが、はたしてそれが教会のためになつたのであろうか、金によつて却つて人の心を腐敗させたように思われる……」と云うように、今迄善なり義なりと信じてやつて来たことが皆怪しくなると共に、信仰心もゆらぎ、崩れて行つた。

そこで野依氏としては、日本で唯一の純粋な信者として尊敬して来た内村牧師を尋ねた。ところがすでに内村氏は大病で死を前にして居られた。然し野依氏としては寸分のゆとりもないので、その枕頭に進んで、

「先生、私は多くの基督信者の中で、先生お一人を深く信じて居りますが、先生はすでに天国も近づいて居られることでありますから、天国の音楽が聞こえましょう！」

と、心の一杯をこめてたずねた時、真面目な内村師は、非常に淋しい顔をそむけて、横に振りながら

「まだ私にはきこえません」

と吉白された。

この時野依さんの、心の最後の頼みの綱がプツツリと切れて、何十年かの信仰心は完全に吹き飛んでしまつた。その精神的なショックと身に迫る老病で、遂に病床に就かれ、汚物も垂れ流しという悲惨な病症を続けられた。

丁度、その頃、求道会館で熱心に聴聞していた浅井鍵治郎さんが商用で野依さんを訪ねると、奥さんが

「浅井さん聞いて下さい。最近は主人が日に何回となくしくじりをする病気になつて、今もその始末をしたばかりなのです。あまりひどいので、あなたは聖書を右手に持つて信仰々々でやつて来たその果てがこの始末ですか、とつい愚痴をこぼしたのですよ。すると主人はにがい顔をして

面をそむけて居りました」

と、吐息と共に打ち明け話をされたので、浅井さんは、早速会館に走つて、常観先生にそのままを報吉された先。生はそれを聞くなり涙をためて、

「それは野依さんは可愛想である。四十年来の信仰は崩れ、その上に家内のものからも責め立てられては、野依さんは血の涙であろう。……」

と言われますと、浅井さんは早速野依さんの家に飛んでかえし

「奥さん。お聞きしたまゝを近角先生に申し上げましたら、先生は涙を浮べられて、それは野依さんは気の毒だ、可哀想であるとくり返されましたよ……」

と話しておられると、野依さんが病室の唐紙を一寸程開けて「近角さんが、野依は可哀想だといつて涙を流してくれましたか。……」

と両眼に一杯の涙をためて言われ、スグ唐紙をしめられたそうである。

その後浅井さんが再び野依家を訪ねると、奥さんが飛び出して来られ

「浅井さん、々々。世にも不思議なことがあるものです。あなたが来て近角先生の話をして下さつてから、パツタリと主人の汚物のしくじりが止つてしまいました。主人もあなたに会いたいと言つて居ります」

とのことで、早速浅井さんが病室を見舞うと、丁寧に

「浅井さん有難う。家内までが呆れはてる私のことを聞いて、近角さんが、可哀想であると涙を流して下されたと聞いて非常に嬉しかつた。そして仏教信者の近角さんにそんな親切があるのだから、聖書にもきつとそういう親切な言葉があるに相違ないと思つて、あれから聖書を何回も読み続けた。然し私にはそうした文字が見つからない。この近角先生の涙はまたとない有りがたいものだと今更に感じ入りました。云々」

とのことであつた。

其後、氏の病気は再び段々悪化し、全く昏睡状態になられたが、その時氏は、ゆめうつつの中に、わき見をしては、かくれてそつと念仏を称えていられたが、午后になつて急に意識が明瞭になり

「嗚呼、長い間わからなかつたことがやつと明らかになつた。わかつた〳〵。南無阿弥陀仏、々々々々、々々」

と念仏されるようになり

「近角先生に来て貰いたい」とのことで、最後の病床で共に念仏しつつ、やすらかに往生を遂げられた。

そして臨終には「この慶を皆に分けてあげたい」とまで遺言せられた。

亡くなられて葬儀を教会でするか、仏式でするかなどの話もあつたが、形式はどうでもよい。永年尽力された会教からの切角の申出もあるのだから、そちらでなさい。それで気が済まねば、先生が法名をつけて、阿弥陀経一巻を読んでおく、と云われると一家はそれで諒承した。

以上の意味のお話を語り終えられて後に常音先生は力強く次のお言葉で結ばれました。

「この話を長々と致しましたのも、兄貴が野依氏の苦悶、を聞いた時、自分自身の廿九歳の頃の狂人同様の大煩悶の経験があるので、思わず識らず『野依さんは可哀想だ！』と涙したのであるが、その涙が、そのまゝ野依氏の心にとどいたのであつた、この涙こそ、兄貴が四十年間、説いても説いても説きつくせないものでありました。

嗚呼、人生、生死流転の有様、浮沈あり禍福あること、あざなえる縄の如きものである。失敗あり、成功あり、纏綿として業報はまつわるけれど、真心徹到の信心のみ終始一貫金剛不壊であります。南無阿弥陀仏。々々々々」

「文責、在記者」

追慕の情念

三瓶徳英

皇太子殿下の御婚儀を午前中テレビで拝観し、正午都電、桜田門で下車し、私と同年齢の老人と二人途方にくれて居るのを憐み、整理員の方が特別の御計らいで、警視庁前の御道筋の新筵の上に導き、座らせて下さいました。

皇太子殿下の御成婚、近角常音先生の御往生から七年目など、東京恋しさの情念に駆られて、郷里を突然出発し、四月六日東京駅に着き、親戚知人の御厄介になり、四月十日朝五時、昨日昨夜の風雨、跡かたもなく、日本晴の天気

午后三時四十分、御帰還の御行列、六頭立ての御馬車を目近かに拝し、皇太子殿下、美智子殿下御会釈の御麗姿、幾十万の人々の満悦の顔々……。

それにつけましても、昔聖徳太子の御慈政、国土人民の依憑の中心となられて、仏法僧の三宝を知らしめたまいしより千三百年。

仏に救われて現在末来に向つて永遠に力強く生き行く幸慶を喜ぶ人々は無数無量で、親鸞聖人は

和国の教主聖徳皇、　広大恩徳謝し難し

一心に帰命し奉り、　奉讃不退ならしめよ

と仰せられました事など思い浮べ、太子様もこの様に沢山の人々から慕われ、悦ばれたことだろうと連想して、思わず目頭が熱くなり、覚えず識らず念仏を称えて、近隣の人々から睨まれました。

次に求道会館の御本尊を懐かしく拝礼した後、常音先生の奥様をお訪ねし、御病臥中なりしに快く御面接賜わり、一時間ばかり先生や大先生の有難いお話など種々承り、涙の中に念仏させて頂きました。

想えば、昭和二十八年の夏、疎開帰国後九年目に上京し、先ず先生をお訪ねました時、先生御自身で会館後方の入口までお出迎え下され、やがて奥様と看護婦さんに促されて病床に御帰り遊ばされ、私は次の間で奥様から先生の御病状など承り驚き悲しみました。併しサツサツとお歩きになるあのお元気だから、きつと御恢復になられると思い、後日御伺いして、御筆跡を頂こうと考えて辞去しました。

そして十二年間居住した新大久保の隣組を訪ねたり、年来の宿望であつた富士登山などをして、再び先生を御伺いした時は、既に御往生の後で、悲しい御通夜と御葬儀を拝した事の迫憶が毎月六日仏前で、幻となり念仏させて頂いて居ります。

昭和九年から十七年まで東京に居りました頃、春と秋の彼岸七日の中一日ずつ常音先生の御講話を願い、津田安代奥さんの特別な御援助、中島忠博青年の熱心な後援などのため、小さい家ながら、新大久保真宗説教所は、溢れる聴衆、知識層も参詣下され、近所の人々も驚異の心地で見られたらしく、御講演後の坐談会は毎度、日の暮れるのを忘れて仏縁を結ばれ、始めて私のための親鸞聖人を知らせて頂いたと謝し、念仏する身となられた方々も数々ありました。

この様な事が縁となつて津田の奥さんの御斡旋で、国木田独歩先生の法事に招かれ、有難い御縁を得ました。

元来独歩先生はクリスチヤンであられたが、御逝去の命日に際し、親類縁者を招き故人を偲びたいが、親戚は仏教の方が多い。どうしたらよかろうと国木田未亡人が津田さんへ御相談なされ、それは三瓶さんに読経してもらいなさいと勧められ、それが実現して私は国木田氏のお宅へ参り観経を拝読したのち下手なお話をしました。

その話は、観経の概要と、これを支那の聖僧、善導大師は一生懸命に研究し講義された著書、四巻の中の一文に刺戟され、開悟されたのが、法然聖人四十三の御年で、時に親鸞聖人三才の時でありました。其後聖人は御両親を亡われ、九歳で出家、学問修行に熱中せられましたが、少年時代から、青年時代、壮年期になられるに従い自己の凡夫人たる事、煩悩熾盛にして如何とも圧え切れない胸中、廿年の苦悶の揚句、二十九才の春、法然聖人を訪ね、他力信仰に徹せられ、自然法爾の慚愧と感謝に念仏して悠々九十年の生涯を終られた事でありました。

又、当時、私の叔父の石井利純から送つて下さつた手紙の一節に

「仏法力の不思議には　諸邪業繫さわらねば」

思いのまゝに万事相はこび

「慶喜報恩の行業なれば」

ただ称名相続のみ云々、のことを紹介し、又この叔父が平常申しますのに

「人間が仕合せになるために三つの方法がある。一つは大学者になること。二には大財産家になること。三つは他力信仰に徹底することだが、第一、第二は普通人には出来ない。第三は何人にも出来るから汝は必ず親鸞教を聞けと云うて下さつたこと、も申し添えました。

又、私の信仰の告白だと申して、三品の懺悔のこと。二十九歳の十二月八日の暁に近角常観先生のお蔭で、生きた阿弥陀仏と、生きた親鸞聖人とを拝ませて頂きました。それは先生の御著書、信仰の余瀝の第二、活ける懺悔の一文中「真実懺悔の極点に達したる時は、則ち信仰の猛火が盛んに燃え上つた時である」との一句でありました。

闇黒の世界が光耀の世界となり、二進も三進も動きのつかぬ行詰りの黒幕が、バサリと切つて落とされ、恢廓広大の境界がひらけ、平沮々たる大白道が顕現し涙と念仏の半ケ月を恵まれましたが、熱湯が漸々にさめる様に、又もとの黙阿弥になつて仕舞いました。が念仏だけは現在でも折々称えさせて頂きます。

本願名号の南無阿弥陀仏は、如来の絶対価値の表現であり、悲智円満の徳性の発露であります。

親鸞聖人は「ただ念仏して弥陀にたすけられる」と仰せられ、また「本願を信ぜんには他の善も要に非ず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願を妨ぐるほどの悪なき故に」と仰せられました。

以上のようなことを話し、焼香がすみ、御客様方と共に酒食を頂きました。

其時、青森県庁に勤務して居られた独歩先生の御実弟の方が、親鸞聖人の教を始めて聞いた。今日は自分の懺悔話をするとて申されましたのは

「私が中学五年生の時、兄が度々洗礼を受けよと申しましたが気がすすまず返事をしませぬので、この姉（独歩氏未亡人）をもつて云わせましたが引き受けませんでした。それは一旦洗礼を受ければ、純クリスチヤンとして、う、そは言えぬ、横着は出来ぬ、すべての悪心悪徳を慎み、純潔無垢の一生を過さねばならぬと聞いて居たから、これからさき永い生活途上、そんな理想がやり遂げられ相にないと思う心から洗礼を受ける事を拒み、兄は激怒して、家庭から追出されたため親戚の家にたより、通学するうち、親戚や姉の計らいで兄の家に帰つたのですけれど、遂に今日まで洗礼を受けずにやつて来ました」

と話されたことがありました。

東京タワー、歌舞伎座なども見物して帰途につき、名古屋の慈光社を訪ねて御厄介をおかけし、夜おそく就褥安眠させて頂きました。

仏間や御座敷などに、近角両先生の御書、池山先生の有難き御自筆、慈力躍如たる御筆勢、自然に頭が下がり、去り難い思いがいたしました。

米原駅からは、遥かに近角先生のお寺お墓を瞑拝して京都に帰り、三度骨肉の御真影を拝跪欽仰し、叡山の四明嶽頂上までバスで登り、琵琶湖を汽船で一巡したり、姪に伴われて大阪の観光バスの一日を楽しみました。

更に鳥取温泉でしばらく神経痛を温めて、一人暮しの隠棲にもどり、自炊蠢動していろ〳〵の追慕の情念で、感謝し、慚愧して時々念仏させて頂いて居ります。

唯驚きましたことは、三月に法談を交じえた油谷登三郎老が九十七才で、私の旅行中、四月二十二日に亡くなられて居りました。妙好人の才市翁と親交を持たれた立派な方でありました。哀悼に堪えません。早速御悔みに参り、別れを惜しみました。

詩の真似をしました御叱正を願います

老軀秋未蟋　進退坐臥嬾　体命逼旦夕
尚未楽安養
具足煩悩塊　徒楽五欲身　憐愍大悲声
歎異九條尊

平灰不知翁　愚人徳英　和南

昭和三四、六月六日稿了。

正信偈私解（十一）

――序記。親鸞聖人の生涯――

白井成允

本誌三月号の拙文の終に私は「但し祖聖が恵信尼を迎えたまうたのは、越後に於いてであろうし、其の以前京に在しし日、既に妻子を持ちたまうたという説を私は肯うことができない」と記したまま、其の根拠を述べないで過ぎた。今これを顧みなければならない。

京に在せし日既に妻子を持ちたまうたと説く人々の根拠はほぼ二つ挙げ得るようである。

其の一は、祖聖が承元の法難にあたりて師上人とともに罪科に処せられた少数の弟子達の数に入らしめられた事の由について。祖聖は当然法然上人門下にありて特に世に顕われておられたのでもないのに遠流に処せられたまうたのは、決して他の故あるにあらず、ただ僧の身としてあるまじき妻子を持ちたるに因のに違いるないであろう、と説かれる。私はにの説を肯い得ない。もし其の如き事由があられたのならば、上に掲げた化巻後序に記されたる流罪の事の追憶の文は、必ずや其に触れて今の文と相を異にした趣を呈しただろうと思われる。大師上人を遠流に陥らしめまつつた重き罪を己れが犯しているのだという自責悔恨の念に苦しみ悩まざるを得ず、或は其の如き苦悩悔恨が念仏の中に救い融かされたとすれば、其の消息が何等かの形で記しあらわされざるを得なかつたであろうと思われる。然るに其の如き消息は些もあらわれず、存するものはただ諸の釈門儒林の教に昏く行に惑い、真仮の門戸を知らず邪正の道路を弁うること無きについての悲歎であり慚愧である。（此の悲歎の文の中に、出家の妻帯を弁証する意を読み込むことは、余りに過ぎたる臆測と言うべきであろう。）

此の事は、祖聖晩年の御書簡の中にも云い得られる。即ち御消息集第二通、念仏者に対する鎌倉にての訴訟に係わりて性信房を慰め謝したまえる文の中に、「このやうは故聖人の御時、この身どものやう〳〵に申され候ひしことなり、事もあたらしき訴にて候らはず※」云々と、承元の昔を憶いおこしておられる一節が存するが、其処にもたゞ正法の遮かるるを歎かるる言のみありて、御自身の不倫の罪を悔いるというべきおもむきを洩らす言は見られない。之を化巻後序の文と相照らして親うに、私には、祖聖の御心の中に、師上人を遠流に致さしめまつつた罪を御身の上に感じておらるる如き痕を見出すことが出来ない。（※　この「候らはず」の語は広く「候ふ」と記されてあるけれども、今は前後の文意に従いて異本に依る。）

之に由つて私は祖聖の罪科に処せられたまうた因由を帯妻の事に置こうとする説を肯い得ず、祖聖の帯妻は既に越後に遷られて後の事であられると推測しまつるのである。

然るに京に在られし日既に妻子をもちたまうたとの主張の根拠としてしばしば祖聖にかゝわる血縁の系図があげられ、更に祖聖真筆と認めらるる古書翰が之を証するものとしてあげられる。然しこれらを資料とする諸の解釈については、私は私の無二の親友佐々木円梁法兄の心血を注いだ名著『親鸞聖人の生涯と信仰』に於いて説き明かされた所に推服してきたので、それ以上別に私として言うべきものをもたない。ただこの著は既に二十余年の昔に著わされたものであり、それ以後世にあらわれた新らしい研究で私の知らないものも多いので、今それら諸家の研究を摂めた上で一家の見を出しておられる宮崎円遵博士の最近の著『親鸞とその門弟』を繙いて、円梁法兄の著に比べて二三の事を記しておくにとどめる。

両著ともに祖聖の結婚を越後配流以後の事と認め、それ以前に妻子をもたれた事を否む点に於いて一致する。但だ実悟上人の「本願寺系図」に祖聖の長男として記された範意（遁世して印信と改む）という人を、円梁法兄は玉日伝説の影響からあらわれたものとして抹殺し去つているのに、宮崎博士は印信を即生の誤字として生かしている。同一系図の一部を信じて一部を捨てるところに恣意が潜む恐れがあり、之を避けようとすれば、此の誤字説を認めねばならぬであろうか。但し印信又は即生が祖聖の生子たるを認めても、直に「今御前の母」を其の母となし、これを祖聖の京に在せし日の妻子となすの説は拒けられる。博士は即生房も越後に在りて生まるるところ、母は即生房を生んで久しからずして死んだのでなかろうかと推測し、又今御前をば即生房の妻の名であろうと推測しておられる。すべてこれらの推測について、恐らく学界に諸意見もあろう

かと思われるけれども、私には今それらを学ぶ余力も無い。

宮崎博士の新著を読むと円梁法兄の旧著の中で一二考え直さねばならぬ点が存するように思われる。二十余年前に学界の定説とされていたものが、新らしい資料の発見や解釈の更新やによつて覆され、真相の闡明に一歩を進めることは嬉しい事である。このような事の一として、法兄の旧著の中で何の疑もなく覚信尼の幼名としてとりあつかわれていた弥女が実は祖聖のめしつかわれた下人であつたろうと思われること、祖聖が常陸を去つて上洛せられた時から越後に別居しておられたと思われてきた恵信尼が実は祖聖と与に上洛してかなり久しく京に住まわれたと思われること、などがある。これらは博士の新著の中から教え示されたところで、私には特に興深く感ぜられた。

「本願寺系図」には「善鸞」を祖聖の第三子となし、「宮内卿、遁世慈信房、依上人不孝無相続義、母同上、」と註している。同上とは、第二子「女子、号小黒女房、母兵部大輔三善為教女、法名恵信」と記されたる恵信尼を指す。然るに、祖聖の書翰の中に、善鸞が母を「まゝはゝ」とよんでいる語があるので、久しく善鸞にとりて恵信尼は継母であつた、即ち恵信尼以前に善鸞を生んだ内室があつたと解釈されてきた。然るに円梁法兄は、それまで久しく信ぜられてきたこの継母子説を覆し、其の書簡の文を読み直して、善鸞が己れの生母を継母という語を以て誣告したのだと解釈した。この法兄の解釈は、覚如上人が恵信尼を「男女六人の君達の御母儀」と註しておられるのにも合い、それ以後広く学界に認められ、今では善鸞が恵信尼の生子であることが疑われなくなつているようである。宮崎博士も之を学界の定説の如く取扱つておられるし、又、博士自身がこの解釈を取るに至つたのは「佐々木先生の著に教えられて」であると曾て語られたことがある。

但し此の解釈と雖も疑わるべき点が無いとは言われない。原文をくりかえし読んでも別の解釈が有り得るようにも思われるし、結局、私にはよくわからないから、この事はここに惜く。

肩の凝る考証をやめて暫らく私に浮んでくる幻の絵を描いてみたい。

上に（拙稿八及九）私は親鸞夢記を窺うた。それは六角堂の観音菩薩が善信の妻となりて衆生救済の誓願を成就せんとする生命を伝える。そこに僧侶の結婚は理念として承認されている。然し単なる理念がこんな美しい夢と現われ得るであろうか。寧ろ夢の中の玉女の相は既に現実に善信の眼の裡に生ける観音菩薩の相を以て映つていたのではあるまいか。私はこの夢記を通して、結婚の理念と共にその理念を現実ならしむべき理想の女性の相が既に仄かに見えるように感ずる。所謂玉日伝説は後世の創作であると云われる。それに違いないであろう。然しそのような伝説が如何にして生まれたであろうか。玉女の身と現われようという観音菩薩の告命の夢の記が其の源であることは疑われないであろう。そうすると玉日伝説と称されている物語の内容にも単に後世の創作とのみ棄て去つてしまい得ないものが其の本質として存するのではないであろうか。

他方恵信尼消息を読むと、「山を出でて六角堂に百日こもらせ給て後世を祈らせ給けるに」と書き出して「やう〳〵に人の申候し時も仰せ候しなり」と結ばれる一節の文の如きは、六角堂に参籠せられた事も法然上人に信順せられた事も、その事のあつた時に直に親しくその事その心情を語り聞かしめられたような生き生きした想出の表現であつて、決して遙かに遠き後の日になつて昔の事を想い出して語られたのを聞いたことがあつたというような色あせた想出の記録とは思われない。老年に及んでかかる文を書き得た奥に、若かりし日既に吉水の集いに参りて若かりし日の善信房とともに法然上人の下に法を聞き信を受けた魂が潜んでいたのだと、私は想われてならない。

のみならず、其に続いて語られる下妻にての夢の想出、法然上人を勢至の化身、善信御房を観音の化身と教えられたといふ告白も、曾て親しく法然上人を見、上人から法を聞いたことのある人の告白として読む方が自然のように想われるが、これは私の感じのみであろうか。

ともかく私の幻の絵には、親鸞夢記の記された頃、善信房の胸の中に若き恵信尼が映つていたと描かれる。

恵信尼は、実悟の系図に、「兵部大輔三善為教女」と記され、今日の学界では概ね越後に三善氏という有力な家があつて恵信尼はその家の出であつたか或はそれと何か親しい縁のあつた人であろうと認めているようである。同じ系図にまた範意（印信）の生母を「後法性寺摂政兼実公女」と記している。これは玉日伝説の創作された後の記録として円梁法兄の抹殺する所である。けれども同一系図の一部を取り一部を捨てるところに恣意の不安が感ぜられないであろうか、周知の如く玉日伝説は玉日を兼実公の女となし、公の願意と法然上人の指示とによつて、善信房に嫁いだとなしている。これは後世の談義本に創作された所と云われ、学的には無視されている。私の幻の絵の中には、三善氏の娘が兼実公の家に仕えており、時々吉水に参りて法を聞くを楽しみとしていた。其の姿が親鸞夢記の中に現われた。やがて越後に流謫の身となりて非僧非俗の愚禿の自覚を深めたまうた時、善信房は、故郷に帰り来つた三善氏の女と相結んで曾ての夢の実現に歩を進めたまうた。

――こんな幻の絵を描くことは許されないであろうか。

（五月廿四日、小庵にて）

編集後記

暑中御見舞い申上げます。

さて八月七日は近角常音先生の七週忌に当りますので先生の思い出の深い原稿を頂きました。ことにこの日は、はからずも広島の原爆の記念日でありますので、忘れることので出来ぬ日であります。

終戦后の、たしか廿五年の春、西源寺様での御法話の一端に「風雨のはげしい夜などには、今度戦死された人々の悲しみの声が聞える思いがする」と申されたことが今なお耳の底に残つて居ります。

○

巻頭の常音先生の御遺墨は、高槻の大字様にお願いして、記載させて頂きました。西岸上の弥陀仏の御心ひとつを、どうしたら解つてくれようか、どうしたら聞きとつてくれようかと、御生涯をかけて御苦労下さいました御心が筆勢に溢れているのを拝し襟を正さしめられます。思えば昭和十八年八月中旬の御筆でありますが、この頃の日本は敗戦色が濃く、国を覆う灰色の絶望の中にうごめいて居りました。こうした時、西岸上の弥陀仏の御心が如何ばかり先生の御心をゆり動かしていられましたことか。御自ら頂かれつつ、やがてそのままを私共への御遺訓として下されたものであります。

ことに先生は御自身の書は一つも世に出されず、常観先生の御思召しをさながらにお伝え下さいましたので、先生の御姿に触れますには、御書翰か御遺墨ばかりで、この御軸は一入なつかしく有難く思います。

○

柳瀬様、三瓶様の御原稿も、先生の七週忌を記念されての尊い原稿であります。

柳瀬様のお原稿にありますように、「あゝもう七週忌！」と月日の流れのはやさに驚きつゝ洪恩を謝しまつります

○

白井先生の正信偈私解は、聖人の御生活の大切なことにふれて力のこもりました御信念を述べて下さいました。先月速達でお送り下さいましたものを、今月の誌上に頂き、恐縮致して居ります。

御案内

毎月第一、二、三、日曜午后一時半日曜例会。

毎月廿四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺、法話会。

七月廿六日、日曜、四日市々大矢知町真西寺、午后二時、法話会。

慈光 第十一巻 第七号昭和三十四年七月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価 一部 二十円（送共）
半年 百二十円（送共）
一年 二百四十円（送共）
編集・発行人 名古屋市南区駈上町二ノ二八 花田正夫
印刷人 名古屋市千種区千種町馬走二八 本田政雄
発行所 名古屋市南区駈上町二ノ二八 慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番